＜書　評＞

# 土生田純之編『古墳時代の実像』

柳　沢　一　男

## 1

本書は、古墳時代研究に意欲的な発言を続ける土生田純之氏が編者となり、地域に根ざした古墳時代社会復元の視点を共有する５名の研究者とともに書き下ろした論考集である。あとがきによれば、本書の刊行意図は今日の古墳時代研究に「畿内中心主義」が蔓延し古墳時代を国家段階とする理解が定説化しているようにみえるが、現実には地方の多様な社会があり、豊かな古墳時代社会像を構築するためにはこうした地域社会を正確に復原することからはじめる必要がある、と考えたことにあるという。

本書の構成はつぎのとおりである。

序　章　古墳時代観の諸相　土生田純之
第一章　吉備と大和　亀田修一
第二章　出雲の石棺式石室　角田徳幸
第三章　若狭・越地域における古墳時代の実相　入江文敏
第四章　古墳文化に見る古代東国の原像　白井久美子
第五章　古墳時代の東国経営　松尾昌彦
終　章　古墳時代の実像　土生田純之

## 2

序章は、編者による編集意図の説明と掲載論考へのコメントである。いわば、編者による書評のようなものだが、評者なりの読み方と幾つかの論点に絞ってコメントを加えたい。

第一章は亀田氏による吉備の古墳時代から奈良時代初期にわたる通史的論述である。

古墳時代中期の吉備は大王墓に匹敵する３基の巨大古墳（造山・作山・両宮山）の築造に最大の特徴がある。これらが築造された５世紀前～後葉の吉備中枢域は列島各地や朝鮮半島の遺物・遺構が顕著だが、その背景を巨大古墳被葬者とその参加の中小首長層の讃岐・播磨・肥後などの諸勢力や朝鮮半島諸地域との積極的な関わりに求める。

両宮山古墳の後、吉備中枢域一帯の首長墳は急激に小型化し、６世紀前葉頃にいたっては首長墳そのものがみられないという。こうした古墳築造状況の変化の背景に、記紀に採録された三度にわたる吉備氏反乱記事との関連を想定する。

６世紀後葉、100m級の前方後円墳が出現するが後続する首長墳は小型化し６世紀末葉には前方後円墳の築造も停止するという。またこの時期に急速に普及する横穴式石室は畿内系で、こうした墓制の変化や、活発化する塩・鉄・須恵器生産を、蘇我氏主導ですすめられた白猪屯倉・児島屯倉設置記事と関連させる。つまり、５世紀後葉以降の首長墳の小型化にはじまり、６世紀中葉以降の墓制変化や各種生産の進展は、大和政権による吉備への介入の諸段階に対応すると指摘する。

第二章の角田論文は、出雲の古墳後期墓制を特徴づける石棺式石室を多様な角度から検討し、これに表出された出雲社会の歴史的特質を掘り下げる。

石棺式石室は６世紀中葉に初現形態が出現した後、ほぼ１世紀弱のあいだ出雲東部の政治的・社会的結集を象徴した排他性のつよい墓制だが、氏はその型式的変遷を５期に区分し、その変遷観にもとづいて石棺式石室分布相の変化を読みとる。

氏は出雲西部の石棺式石室を採用した古墳は前方後方墳と方墳に限られるとする。また、独自な子持壷を使用した祭祀が天井石を露出した墳丘盛土過程で実修されたと想定し、石棺式石室はこうした独自の祭祀と一体のものとして創出されたとみる。

６世紀中葉頃に突如登場した石棺式石室は、その形状・構造から九州の有明海沿岸域に特徴的に分布する横口式家形石棺との関連が説かれてきたが、それらとの年代上のヒアタスは大きい。氏は、横口式家形石棺ではなく肥後南部の宇賀岳古墳の横穴式石室を介在させると、相互の系譜的つながりが容易に説明できると指摘する。また、出雲東部の横穴墓や平入り横口式家形石棺などは肥後からの影響がみとめられるが、独自的な展開から、肥後からの一方的

な伝播というよりも、出雲東部勢力が主体的に受容したものと推測する。

第三章の入江論文は、日本海側の若狭から越中までの東西に長い北陸地方を対象に、前期～後期古墳の築造変遷を通史的にたどり、周辺地域との網の目的な相互関係を紐解きつつ地域的特質を抽出する。

前期前半の首長墳は一部地域に短小な前方部を付設する纒向型前方後円墳が波及するが、大半の地域は弥生後期の方形低墳丘墓を主とする伝統的墓制に前方後方墳が被さるように展開し、大和政権との関係は希薄とする。一方、前期後葉の福井平野には広域首長墳の系譜が成長するが、その背景に日本海側の海上交通を掌握し九州・朝鮮半島との交渉を想定する。中期に新たに登場した若狭の広域首長墳系譜を含めて、当地域の広域首長墳系譜の顕著な墓域移動は大和政権中枢の政治動向と密接な関連をもつとみる。他方、５世紀中葉以降、若狭・越の首長墳の副葬品に朝鮮半島製の文物が顕著になるほか、九州系横穴式石室が継続的に採用される。こうした状況について、氏は当地域の首長層が大和政権の一角を担い朝鮮半島への軍事派遣に関与したとみる。

６世紀中葉、広域首長墳が前方後円墳から大型円墳に代わり、横穴式石室も北部九州系から畿内系横穴式石室へと変化する背景に、磐井の乱に勝利した大和政権による中央集権化の進展と地域首長の官僚化を想定する。

第四章の白井論文は、房総半島を中心に関東全域に目配りして、弥生時代から古墳時代終末期までの地域の様相を通史的に論述する。

まず常総地域の弥生時代は、印旛・手賀沼から霞ヶ浦・北浦一帯に広がる湖水地帯（香取海）の北側で環壕集落・方形周溝墓や小銅鐸などを基本的に受け入れることがなく、香取海が弥生文化「北方波及の壁」になっていると指摘する。

関東の前期首長墳は前方後方墳が主流だが、氏は奈良盆地大和古墳群に見られる大型前方後方墳のあり方を評価し、王権から距離をおいたとみるよりも、王権の東国進出を象徴する墳形だと主張する。

中期の常総地域を代表する墓制要素として滑石製石枕・立花は著明だ。これらは天竜川以東から那珂川流域までの太平洋沿岸域に分布するが、なかでも香取海沿岸の集中状況は、この地域の人びとの日常的なつながりによってある種の葬送観念が共有された象徴とみる。

後期における特徴的な前方後円墳の築造動向について、氏はヤマト王権の東北進出を背景とした政治的・軍事的基盤としての重要性や、地域首長が中央有力首長と結びついての領域支配構造を反映したものとする。また、後期後半に埋葬施設の使用石材や埴輪の広域移動に、積極的な首長間・地域間交流を想定する。

関東の群集墳について、氏は弥生時代の方形墓を中心とした伝統勢力による群集墓が前期から後期にわたって営まれる「先行型」群集墳と、中期後葉以降の新興勢力による「新興型」群集墳に分離すべきだという。

第五章の松尾論文は、王権から分与された各種の威信財を素材に、「東国」と長野県域を取り上げて、それらの分布動向の変化からヤマト王権による地方経営とその進展過程を読みとる。

まず、氏は前期に分与された銅鏃諸形式の分布動向から、十字鏑銅鏃と有篦被銅鏃の分布の違いは三角縁神獣鏡の東方型・西方型鏡群の広がりと同様に王権の地域認識を反映したものと指摘する。

つぎに長野県域を対象に古墳築造様相と威信財分布動向から、５世紀中葉を境に長野盆地の既成首長層に代わって下伊那地域の首長層が台頭したとする。さらに、６世紀後葉に下伊那の前方後円墳築造が激減する現象は、馬具・飾大刀の分布変化と連動し、王権の地方小首長層の直接的経営の反映とみる。

また、関東地方の武器・武具・馬具などの分布変動を検討し、王権による軍事編成に３つの画期を設定する。第１に有稜系鏃が共有される古墳時代開始期、第２に既成首長墳に加えて新興首長層にも鋲留甲冑の配布がみとめられる５世紀中葉、第３に首長墳を中心に挂甲が配布される６世紀中葉を想定し、王権による地方経営の進展状況に対応するとみる。

終章の土生田論文は、特定地域を対象にしたものでなく、おもに首長墳の築造過程において畿内中心主義的理解の限界性と地域の自律性を強調する。

まず氏は、神奈川県秋葉山古墳群周辺域と山梨県中通周辺の首長墳築造過程を俎上にあげ、それぞれの大型墳が５世紀前葉頃に築造を終える背景に畿内から東方への主要ルート変更の可能性と、併せて在地の多様な事情も配慮すべきだとする。またギアツの「劇場国家」論、東南アジア諸地域の政体から抽象された「マンダラ」論の王権儀礼と巨大古墳の社会的意味を対比する。

そうして、５世紀後葉～６世紀前葉の各地の首長

墳築造過程は、首長墳系譜が一定領域内を移動する首長連合的性格から特定古墳群に固定化する段階＝国造制への転換の序章と想定する。また、屯倉や郡（評）司の配置など畿内政権の地方支配が進展した７世紀後半代にも地域の連合体制は残存し、畿内の一元的支配は貫徹していないとする。

## 3

以上のように、本書は列島諸地域の古墳時代を通史的ないしトピックス的に叙述し、多様な古墳時代地域像を提示した内容は刺激的である。

さて、本書刊行意図の一つに古墳時代を国家段階とみなす畿内中心主義に対して、地域独自の論理（事情）を重視した歴史像を提示することにあるという。しかし、古墳時代は前方後円墳を頂点とした階層的墓制構造を共有し、それが畿内の中央政権を軸として展開していることを無視することはできない。各論者とも程度の差はあれ、中央政権からの影響と相互関係についての目配りは十分だが、２、３気づいたところを述べておきたい。

まず、地域首長墳系譜の変動（５世紀前葉、同後葉、６世紀前葉の３度）を政権中枢の政治的変動に連動するとみる都出氏の言説について、本書では見解が分かれる。まず５世紀前葉の変動（多少の年代幅をもつ）は、列島の広域で顕著に観察されるものである。ちなみに評者が日頃フィールドとしている南九州の場合、日向では前期に九州最大規模の前方後円墳が継続した生目古墳群が衰退して西都原古墳群に巨大古墳が出現し、大隅では首長墳系譜は塚崎古墳群から唐仁古墳群に移動する。広域的にみても同様な現象は各地にみられるし、前期に多くの首長墳系譜が並立した地域（吉備、讃岐、筑前、日向など）では首長墳系譜が激減する。つまり、この時期の変動は多面的、かつ列島の広域で進行している。土生田氏が取り上げた相模・甲斐の事例もその一例であろう。氏はその要因を交通路の変更と地域の自律的事情で説明しているが、この時期の王権の影響力と変動内容を過小評価しているように思えるがいかがであろうか。

つぎに５世紀後葉～６世紀前葉の築造変動はどうだろうか。都出氏は５世紀後葉の変動を雄略期、６世紀前葉のそれを継体期の政治過程に連動するとしたが、土生田氏は特定古墳群への固定化現象を国造制への進行過程と想定する。評者も九州の諸例を取り上げて同様な見解を述べたことがあり、氏の視点に賛成する。ところで５世紀中葉～後葉の鋲留横矧板短甲の特徴的な偏在的集中分布は、松尾論文が長野県域で詳細を論じ、また早くに川西宏幸氏が指摘したように、激化する朝鮮半島情勢に備えて王権がすすめた軍事編成を反映したものとみてよいだろう。近年、詳細が判明しつつある韓半島全羅道の前方後円墳や、忠清南道の百済王都周辺での横穴墓・地下式横穴墓の築造動向は、雄略・継体期にすすめられた朝鮮半島外交と王権による軍事編成と派遣された地域勢力の関係を如実にしめすものだろう。雄略期から継体期にかけて軍制と地方首長再編が同時的にすすめられ、国造制の布石が打たれたとみられよう。

もう一つ、論考の多くが指摘しているのは６世紀中～後葉にかけての変化である。地域によって多少の時期差があるが前方後円墳の築造停止、首長墳の大型方・円墳化、装飾大刀や挂甲の分布偏重、畿内型（系）横穴式石室拡散などの諸現象を、屯倉・部民制を基礎とした王権による直接的地方経営の本格的な進展と想定する視点である。雄略朝を古代律令国家への転換期とみる従来の主張に対して、和田晴吾・松木武彦氏による提案と触れあう。

近年、日本における国家形成論に関する議論が沸騰している。都出比呂志氏が提起した前方後円墳体制論を契機に、マルクス主義古典学説、新進化論諸学説、植民地化前の東南アジア諸政体に関する文化人類学の研究成果などを参照した諸説、あるいは階級対立的側面よりも利益共同体的側面を重視した国家論などが提出されている。本書の諸論考は、直接的に国家形成論と関連しないが、さまざまな場面で触れあっている。地域の論理を軸とした古墳時代像の提示においても、国家形成論を見据えた議論が要請されるところである。

（宮崎大学教授）

A5判、本文291頁；東京、吉川弘文館；2008年４月刊；
税込価格：9,975円；ISBN：9784642093156